

THE FOURTH SEMINAR ON RINGS

Date: September, 4 - 5, 1971

Place: Zaōsō, Kamino-yama-shi

PROGRAM

SATURDAY, 9:00 A.M.

9:00-10:00

- (1) On the double centralizer property
Mr. Y. Suzuki, Tōhoku University

10:10-11:10

- (2) Torsionless modules and flat epimorphisms
Mr. K. Msaake, Tōkyō Gakugei University

11:20-11:50

- (3) On quasi-Frobenius extensions
Mr. Y. Kitamura, Hokkaidō University

1:30-2:30 P.M.

- (4) QF-rings and balanced rings
Mr. Y. Iwanaga, Tōkyō University of Education

2:40-3:40

- (5) On the annihilator ideal of the radical of a group algebra
Mr. Y. Tsushima, Ōsaka City University

3:50-4:20

- (6) On the radical of group rings
Mr. K. Motose, Shinshu University

6:00-8:00

A gathering for social and business purposes

SUNDAY, 9:00 A.M.

9:00-10:00

- (7) Modules over bounded Dedekind prime rings
Mr. H. Marubayashi, Ōsaka University

10:10-11:10

- (8) On bilinear modules and Witt rings over a commutative ring
Mr. T. Kanzaki, Ōsaka City University

1:00-2:00 P.M.

- (9) On centralizers in separable extensions
Mr. K. Sugano, Hokkaidō University

2:10-3:10

- (10) On Galois theory of pre-schemes
Mr. Y. Takeuchi, Kōbe University

E N T R Y

K. Aoyama
 S. Asano
 S. Endō
 S. Gotō
 M. Harada
 H. Harui
 Y. Hayakawa
 M. Hikari
 S. Hirano
 K. Hirata
 M. Hongan
 A. Inatomi
 N. Ishi-i
 W. Ishi-i
 T. Ishikawa
 T. Iwagami
 Y. Iwanaga
 H. Kanbara
 T. Kanzaki
 H. Katayama
 T. Katō
 Y. Kawada
 K. Kishimoto
 K. Kitamura
 Y. Kitamura
 H. Marubayashi

K. Masaike
 Y. Miyashita
 M. Miyauchi
 I. Mogami
 K. Motose
 T. Nagahara
 A. Nakajima
 T. Nakamoto
 K. Nakane
 Y. Ninomiya
 M. Ōhori
 T. Onodera
 K. Ōshiro
 S. Samukawa
 K. Sugano
 T. Sumioka
 Y. Suzuki
 H. Tachikawa
 Y. Takeuchi
 H. Tominaga
 Y. Tsushima
 T. Tsuzuku
 T. Ukegawa
 Y. Watanabe
 M. Yamada
 K. Yamagata

On the double centralizer property

鈴木 保高 (東北大)

R ($\neq 1$) を環, M を右 R -加群とし, $D = \text{End}(M_R)$, $Q = \text{End}({}_D M)$ とおく.
 R から Q への自然な写像が onto のとき, M_R は D.C.P. (double centralizer property)
 を持つと云う.

定理 (Lambek) R_R の injective hull と $E(R_R)$ であらわすとき,
 $E(R_R)$ が D.C.P. を持つ $\iff E(R_R)/R_R \hookrightarrow \prod E(R_R)$.

いま, ${}_D M$ は f.g., すなわち D -exact sequence $\bigoplus_D D \xrightarrow{\beta} {}_D M \rightarrow 0$ が存在する
 とすれば, $0 \rightarrow Q_Q \xrightarrow{\beta^*} \text{Hom}(\bigoplus_D D, {}_D M) \approx \bigoplus M_Q$ は exact である. このとき,
 上の定理の拡張として, 次の定理を得る.

定理 ${}_D M$ は f.g. とする.

M_R が D.C.P. を持つ $\iff \hat{\bigoplus} M_R / \beta^*(R) \hookrightarrow \prod M_R$.

K_R, U_R が与えられたとき, U_R -dom. dim. $K_R \geq n$ とは,

$$0 \rightarrow K \rightarrow V_1 \rightarrow V_2 \rightarrow \dots \rightarrow V_n, \quad V_i \approx \prod U_R$$

なる R -exact sequence が存在することであると定義すれば, 次の定理が成り立つ.

定理 M_Q -dom. dim. $Q_Q \geq 2$.

定理 M_R が忠実ならば, つぎの条件は同値である:

(1) M_R は D.C.P. を持つ.

(2) M_R -dom. dim. $R_R \geq 2$, ${}_D M_Q \approx {}_D \text{Hom}(Q_R, M_R)_Q$.

すべての忠実な右 R -加群が D.C.P. を持つとき, R を右 QF-1 環と呼ぶ. QF-1
 環についてよく知られた結果としては,

定理 (Dickson-Fuller) 可換な Artinian QF-1 環は QF 環である.

Torsionless modules and flat epimorphisms

政池 寛三 (東京学芸大)

R と環とする. right R -module M が dense-torsion free であるとは, M の 0 ではない任意の元の annihilator が R の dense right ideal ではないことと定義する.

こゝでの目的は, R の maximal right quotient ring Q の性質を dense-torsion free module を使って調べることである.

定理 次の条件は同値である:

- (1) 任意の f.g. dense-torsion free right R -module は torsionless.
- (2) Q は R の left quotient ring で, injective hull $E(Q_Q)$ の任意の f.g. submodule が $(Q-)$ torsionless.

この結果は, 特に Q が classical quotient ring の場合, 任意の f.g. torsion free module を free module に embed する問題に apply することが出来る.

また, canonical map $R \rightarrow Q$ が flat epimorphism になる場合の特徴づけも dense-torsion free module を用いて与えられる.

R が classical quotient ring Q_{cl} を持つ場合, dense-torsion free module と torsion free module の間には密接な関係があるが, これら二つの定義が同値であるために Q_{cl} が満たすべき条件を求めることが出来る.

QF-1 ring に関する Thrall の問題, および *balanced ring* について最近得られた結果を紹介し, 今後の課題を取り上げる。

1. QF-1 rings

定義 A が *left QF-1 ring* とは, すべての忠実左 A -加群が *balanced* であることと定義する。

Thrall の問題とは, "QF-1 algebra をその *ideal structure* で特徴づける" ということであるが, 現在迄未解決である。次の結果は, この問題に対する最初の前進であり, 非常に重要である。

定理 1 (Morita [8]). $\{U_i\}$ を非同型な *minimal faithful left A -modules* の全体とするとき, Artin 環 A が *left QF-1* であるための必要条件は次の通り:

- (1) 各 U_i は *balanced*
- (2) 各 U_i は任意の既約左 A -加群を *generate* または *cogenerate* する。

この結果を用いることにより, 次の特殊な場合について Thrall の問題は解決された:

- (I) *generalized uniserial ring* (Fuller [5])
 - (II) 代数的閉体上の多変数環で, 根基の平方が 0 の場合 (Tachikawa [9])
- また, 次の場合には, 著者らの友が問題を解決に導いた:
- (III) 可換 Artin 環 (Floyd [4], Dickson-Fuller [2], Tachikawa [9])
 - (IV) *semi-primitive ring* (Camillo [1])

2. *Balanced ring*

定義 A が *left balanced ring* とは, すべての左 A -加群が *balanced* であることと定義する。

環の *balanced* 性は極小条件と導き, 問題は *local* な場合に帰着する:

定理 2 *left balanced ring* は *left Artinian*.

定理 3 (Fuller [6]) *indecomposable balanced ring* は *local ring* 同値。

balanced ring の構造は, 次によって決定される:

定理 4 (Deab-Ringel [3]) A は *local ring* とする。
 A は *balanced ring* \iff $\begin{cases} (1) A \text{ は uniserial ring} \\ (2) A \text{ は exceptional ring} \end{cases}$

定理 5 (Camillo [1], Dickson-Fuller [2]) A は可換環とする。

A は *balanced ring* $\iff A$ は *uniserial*.

[1] V. P. Camillo: Trans. Amer. Math. Soc. 149(1970). [2] S. E. Dickson - K. R. Fuller: Proc. Amer. Math. Soc. 24(1970). [3] M. V. Dlab - C. M. Ringel: Carleton Math. Series 39, 45(1971). [4] D. R. Floyd: Pacific J. Math. 27(1968). [5] K. R. Fuller: Math. Z. 106 (1968). [6] K. R. Fuller: Pacific J. Math. 34(1970). [7] J. P. Jans: Math. Ann. 188(1970). [8] K. Morita: Math. Z. 69(1958). [9]. H. Tachikawa: To appear. [10] R. M. Thrall: Trans. Amer. Math. Soc. 64(1948).

On quasi-Frobenius extensions

北村 好 (北大)

F. Kasch により得られた Frobenius 拡大に関する諸結果は, B. Müller と A. Rosenbly により(独立的に) quasi-Frobenius 拡大 (QF 拡大) に拡張された. ここでは, QF 拡大についてのいくつかの結果をのべる.

まず, QF 拡大の自己準同変環について,

定理 A/B は左 QF (resp. QF) 拡大, $M \in \mathcal{K}_A$ とする.

$$M \otimes_B A_A \subset M_A^{(A)} \Rightarrow \text{End}(M_B)/\text{End}(M_A) : \text{左 QF (resp. QF) 拡大.}$$

系 A/B は左 QF (resp. QF) 拡大, $M \in \mathcal{K}_A$ とする.

M_A : 完全忠実, M_B : f.g. projective $\Rightarrow \text{End}(M_B)/\text{End}(M_A) : \text{左 QF (resp. QF) 拡大.}$

この事実を用いて, 次のことが示される.

定理 B : 単素環, A/B : QF 拡大, $e^2 = e \in A$, $f^2 = f \in B$ とする.

eA : 忠実入射的, fB : 忠実入射的 $\Rightarrow \text{End}(eAe/eA) / \text{End}(fBf/fB) : \text{QF 拡大}$

つまり, QF 拡大 A/B において, A (または B) の idempotent 性質が B (または A) に遺伝するのを認べてみる. 例えば, Frobenius 拡大における如く,

定理 A/B は QF 拡大とする.

$$(1) \text{Pd}_A(V) < \infty \Rightarrow \text{Pd}_A(M) = \text{Pd}_B(M) \quad (M \in \mathcal{K}_A).$$

(2) A_B (または B_A): 完全忠実

$$\Rightarrow \text{Pd}_B(M) = \text{Pd}_A(M \otimes_B A) = \text{Pd}_A(\text{Hom}_B(A, M)) \quad (M \in \mathcal{K}_B), \text{rGD}(B) = \text{rGD}(A).$$

系 A/B は QF 拡大とする. B が左 (resp. 右) perfect ならば, A もそうである. 特に, B_A (または A_B) が完全忠実ならば, 逆も成立する.

有限生成射影的かつ忠実入射的右 A -加群が存在するとき, A は QF-3 であることが, 示される.

定理 A/B は左 (または右) QF 拡大とする.

$$A : \text{左 QF-3} \Leftrightarrow B : \text{右 QF-3}.$$

On the annihilator ideals of the radical of a group algebra

津島 行男 (大阪市大)

同題の論文 (Osaka J. Math. 8 (1971), 91-97) の前半を解説する。すなわち、 G を有限群、 K を標数 p の体とすると、 G のある正規列から群環 KG の (部分的に 双約な) 組成列を構成するのが目標である。

記号 群 H に対し、 KH の Jacobson 根を π_H とあらわす。 KG の (両側) イデアル $\mathfrak{z}, \mathfrak{z}'$ に対し、 $(\mathfrak{z}': \mathfrak{z}) = \{x \in KG \mid \mathfrak{z}'x \subset \mathfrak{z}'\}$ とおく。特に、 $(0: \mathfrak{z}) \in \mathcal{P}(\mathfrak{z})$ とあらわす。

\mathfrak{z} の定理は基本的である:

定理 (中山) A は K 上の Frobenius algebra, \mathfrak{z} は A のイデアルとする。 A/\mathfrak{z} が K 上 Frobenius であるための必要条件は $\mathcal{P}(\mathfrak{z}) \neq \emptyset$ なる A の元 c が存在することである。そのとき、 $A, A/\mathfrak{z}$ 上の 正則 1 次写像をそれぞれ λ, μ とし、 $\lambda_c \in \lambda_c(x) = \lambda(xc)$ で定義される A 上の 1 次写像とすれば、 $\mu\psi = \lambda_c$ (ψ は 自然写像 $A \rightarrow A/\mathfrak{z}$) である。さらに、 A が symmetric algebra であるとき、 A/\mathfrak{z} がまた symmetric であるための必要条件は、上の c が中心に属することである。

$A = KG$ に対しては、正則 1 次写像 (の \rightarrow) λ は次の如く具体的に与えられている: $\lambda(\sum_{g \in G} a_g g) = a_1$. ことに、

定理 $\mathcal{P}(\pi_0)$ は G の任意の自己同型で不変な KG の一元で生成される。

ことに、 $H \triangleleft G$ とし、 $\hat{\pi}_H = KG \cdot \pi_H = \pi_H \cdot KG$ とおく。以下、 π_G を π とあらわす。

系 (1) $KG/\hat{\pi}_H$ は K 上の symmetric algebra.

(2) e は KG の原始中算元とすれば、 $KG/\pi e \cong (\hat{\pi}_H: \pi)e/\hat{\pi}_H e$.

さらに、

定理 $P_2 > H_2 > P_1 > H_1$ は G の正規部分群列とし、 P_2/H_2 は自明でない p -群とする。 $\mathfrak{y}_i = \text{Ker}(KG \rightarrow K(G/H_i))$ とおけば、

(1) $(\hat{\pi}_{P_2} + \mathfrak{y}_2: \pi) > \hat{\pi}_{P_2} + \mathfrak{y}_2 > (\hat{\pi}_{P_1} + \mathfrak{y}_1: \pi) > \hat{\pi}_{P_1} + \mathfrak{y}_1$.

(2) 原始中算元 e が \mathfrak{y}_2 に含まれないならば、 $(\hat{\pi}_{P_2} + \mathfrak{y}_2: \pi)e/(\hat{\pi}_{P_2} + \mathfrak{y}_2)e \cong KG/\pi e$, $(\hat{\pi}_{P_2} + \mathfrak{y}_2)e \neq 0$.

系 G の chief composition factors で自明でない p -群となるものの個数を π とすれば、 KG の 1st Cartan invariant C_{11} は $\pi+1$ 以上である。

以下、 R は 1 を持つ半環素環とし、その根 $J(R)$ に關する剰余環 \bar{R} の中心は標数 p の素体を含むものとする。また、 G は有限群で、 P をその p -Sylow 部分群とする。 H は G の正規部分群を意味するものとし、 G の H に關する剰余群を G^* であらわす ($\sigma \in G$ の H に關する剰余類を σ^* であらわす)。

R を標数 p の代数的閉体とするとき、

$$(1) (G:H) \cdot (|P|-1) \geq \dim_{\mathbb{Z}} J(\mathbb{Z}G) \geq |P|-1$$

$$(2) (G:H) \cdot (|P|-1) = \dim_{\mathbb{Z}} J(\mathbb{Z}G) \iff P \triangleleft G$$

$$(3) |P|-1 = \dim_{\mathbb{Z}} J(\mathbb{Z}G) \iff P : G \text{ の Frobenius 部分群}$$

が成り立つ [2], [3]。こゝでは、 G が (2) または (3) の構造を持つときには、群環 RG の根を求めぬのが主な目的である。

一般に $J(RH)G \subset J(RG)$ で、 RG が半環素であることはよく知られているが、特に $(G:H)$ が R の単元であれば $J(RG) = J(RH) \cdot G$ が成り立つ [1]。 $J(RP)$ については、

$$\text{定理 1} \quad J(RP) = \left\{ \sum_{\sigma \in P} a_{\sigma} \sigma \mid \sum a_{\sigma} \in J(R) \right\}$$

したがって、 $P \triangleleft G$ の場合は、 $J(RG) = J(RP) \cdot G$ により $J(RG)$ が与えられる。つぎに、 P が G の Frobenius 部分群の時は、 G の Frobenius 核を N とすれば、 $e = |N|^{-1} \sum_{\sigma \in N} \sigma$ は RG の中心の単元で、 $J(RG)$ はつぎの定理で与えられる。

$$\text{定理 2} \quad J(RG) = J(R)G + J(RP)e$$

定理 1 に関連して、次の定理が示されるが、これは正規族に關するある種の結果と導くために用いられる。

定理 3 S を半環素環、 $|N| > 1$ とするとき、つぎは同値である：

- (1) $\bar{S} = S/J(S)$ は標数 p で、 H は p 群。
- (2) SH は半環素環
- (3) $\sum_{\sigma \in G} \bar{a}_{\sigma} \sigma^* : \bar{S}G^*$ の単元 $\Rightarrow \sum_{\sigma \in G} a_{\sigma} \sigma : SG$ の単元
- (4) $\sum_{\sigma \in G} \bar{a}_{\sigma} \sigma^* : S G^*$ の単元 $\Rightarrow \sum_{\sigma \in G} a_{\sigma} \sigma : SG$ の単元

[1] Y. Tsushima: Radicals of group algebras, Osaka J. Math. 4(1967).

[2] D. A. R. Wallace: Note on the radical of a group algebra, Proc. Camb. Phil. Soc. 54(1958).

[3] D. A. R. Wallace: On the radical of a group algebra, Proc. Amer. Math. Soc. 12(1961).

Abel 群の理論の一般化は、今迄も色々な立場から試みられて来た。可換環上の加群の方向へは、I. Kaplansky, E. Matlis 等によってなされ、非可換環上の加群の方向でも、Torsion theory, rank, divisibility 等について、多くの人達によって研究されて来た。しかしながら、非可換環上の加群についてはその作用環が一般的すぎるため、Abel 群固有の理論と同様な理論を展開することは(ごく一部を除き)うまくいっていない様に見える。こゝでは、作用環を bounded Dedekind prime ring に限定すると、Abel 群の理論はほぼ完全にそのまゝ成立することを示す。

R ($\neq 0$) を prime Goldie 環、 Q をその全商環とする。 R が maximal order で、そのすべての essential one-sided ideal が projective のとき、 R は Dedekind であると言う。また、 R の essential one-sided ideal がつねに non-zero ideal を含むとき、 R は bounded であると言う。以下、 R は bounded Dedekind prime ring とし、 M は R -右加群とする。

定義 1 (i) M の各元の annihilator が R の regular element を含むとき、 M は torsion module であると言う。

(ii) P を R の prime ideal とする。 M の各元の annihilator が P の中を含むとき、 M は P -primary であると言う。

次の定理により、torsion module の理論は primary module のそれに帰着される。

定理 1 torsion module は primary modules の直和である。

有限生成加群については、

定理 2 M は f.g. とし、その torsion part を T とすれば、

(1) $M \cong T \oplus M/T$

(2) M/T は R の uniform right ideals 有限個の直和に同型

(3) T は eR/eP^n なる形の uniform cyclic modules 有限個の直和に同型、こゝに P は R の prime ideal で、 e は R_P (Goldie の意味における P に関する local ring) の uniform idempotent である。

M が f.g. の場合には、その任意の submodule も同様な分解を持つが、そのとき次の定理が成立する。

定理 3 M は f.g. とし、 N をその submodule とする。 M, N を定理 2 における如く分解したとき、それぞれ uniform right ideal direct summands の個数を r, s とし、与えられた prime ideal P に対して、 M, N の P -primary uniform cyclic direct summands の個数をそれぞれ α_p, β_p とし、それらの direct summands の位数をそれぞれ $P^{\alpha_{p1}}, P^{\alpha_{p2}}, \dots, P^{\alpha_{pr}}$ ($\alpha_{p1} \geq \alpha_{p2} \geq \dots \geq \alpha_{pr}$), $P^{\beta_{p1}}, P^{\beta_{ps}}, \dots,$

$P^{\beta_1} P^{\beta_2} \dots P^{\beta_{l_p}}$ ($\beta_1 \geq \beta_2 \geq \dots \geq \beta_{l_p}$) とすれば, つぎのことが成り立つ.

- (1) $s \leq r$
- (2) $l_p \leq k_p, \beta_{pi} \leq \alpha_{pi} \quad (i=1, 2, \dots, l_p)$
- (3) $s + \sum l_p = \dim N$

(この定理の証明には, 多くの準備が必要である.) 定理 2 に注目して次の定義とする.

定義 2 M が R の uniform right ideals と cyclic modules との直和として表わされる
とき, M は decomposable であると言う.

定理 4 decomposable module の submodule は decomposable である.

特に primary module に関しては,

定理 5 M は P -primary とし, $A = \{x \in M \mid xP = 0\}$ とおく. そのとき, M が
decomposable であるための必要条件は, 次の条件を満たす submodules の chain
 $A_1 \subseteq A_2 \subseteq \dots \subseteq A_n \subseteq \dots$ が存在することである:

- (a) $\bigcup A_n = A$
- (b) 各 A_n は bounded height (i.e. $\exists k \mid A_n \cap MP^k = 0$).

定義 3 R の任意の regular element c に対して $Mc = M$ が成り立つとき, M は
divisible であると言う.

定理 6 divisible module は \mathcal{Q} の minimal right ideals と $E(eR/eP)$ なる
形の modules との直和である, 二に P は R の prime ideal, e は R_P の uniform
idempotent, $E(eR/eP)$ は eR/eP の injective hull を意味するものとする.

さらに, $E(eR/eP)$ については, 次の定理が成り立つ.

定理 7 $E(eR/eP) \cong \varinjlim eR/eP^n$.

定理 8 $E(eR/eP)$ の自己準同型環は $e\hat{R}_P e$ に同型である, 二に \hat{R}_P は
 R_P の $\mathcal{P}R_P$ に関する completion を意味する.

以下において、 Λ/Γ は環拡大とし、 $C = V_\Lambda(\Lambda)$, $Z = V_\Gamma(\Gamma)$, $\Delta = V_\Lambda(\Gamma)$, $C' = V_\Delta(\Delta)$, $A = V_\Lambda(C')$ とおく。

定理 Λ/Γ は H-分離的 (すなわち、 ${}_\Lambda \Lambda \otimes_\Gamma \Lambda_\Lambda \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$) で、 Λ は Γ 上右 (または左) f.g. projective とする。このとき、 Λ の部分環の族 $\mathcal{B} = \{B \mid B/B_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda, B/\Gamma: \text{分離的}\}$ と Δ の部分環の族 $\mathcal{D} = \{D \mid D/C: \text{分離的}\}$ との間には、互いに可換子環をとることにより 1-1 対応がつけられる。

この定理を証明するために、次の諸命題が導出される。

命題 1 $\Gamma < B < \Lambda$, ${}_B B \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$, $V_\Lambda^2(B) = B$ とする。(たとえば、 Λ/Γ が H-分離的で ${}_B B_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma$ ならばよい。) $D = V_\Lambda(B)$, $\Gamma' = V_\Lambda^2(\Gamma)$ とおけば、つぎのことが成り立つ。

- (1) $\Delta/D: \text{分離的} \iff {}_\Gamma \Gamma' \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$
 $\Delta/D: \text{H-分離的} \iff {}_\Gamma B_{\Gamma'} \otimes_\Gamma (\Gamma' \otimes \cdots \otimes \Gamma')_{\Gamma'}$
- (2) さらに、 B が Γ 上右 f.g. projective ならば、
 $B/\Gamma: \text{分離的} \iff {}_B D_B \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$
 $B/\Gamma: \text{H-分離的} \iff {}_B \Delta_B \otimes_\Gamma (\Gamma \otimes \cdots \otimes \Gamma)_\Gamma$

命題 2 Λ/Γ は H-分離的とする。 $B \in \mathcal{B}$ に対し、つぎのことが成り立つ。

- (1) Δ は $D = V_\Lambda(B)$ 上右 (かつ左) f.g. projective
- (2) D/C は分離的で、 $V_\Lambda(D) = B$ 。

命題 3 Λ/Γ は H-分離的とし、 $D \in \mathcal{D}$ (または、 Δ/C が分離的で、 $\Delta > D > C$ は C 上半単純) とする。 $B = V_\Lambda(D)$ とおけば、つぎのことが成り立つ。

- (1) $V_\Lambda(B) = D$
- (2) ${}_B B_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$ で、 $B \otimes_\Gamma \Lambda \rightarrow \Lambda$ ($b \otimes \lambda \mapsto b\lambda$) は B - Λ 分解する。
- (3) Λ/B は H-分離的。

補題 Λ は可換環 R 上の多項式環とし、 Γ はその部分多項式環とする。 Λ が R 上 f.g. projective で、 Γ が R -分離的ならば、 ${}_\Gamma \Gamma_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$ である。

さて、 Λ/Γ が H-分離的で ${}_\Gamma \Gamma_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$ であるとき、 Λ が Γ 上右または左 f.g. projective ならば、 Λ/Γ は Frobenius 拡大となり、したがって右かつ左 f.g. projective である。

系 Λ/Γ は H-分離的、 ${}_\Gamma \Gamma_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$ 、かつ Λ は Γ 上 (右または左) f.g. projective とする。 $\Delta = Z$ ならば、 Λ の部分環の族 $\{B \mid B/\Gamma: \text{H-分離的}\}$ と Z の部分環の族 $\{R \mid R/C: \text{分離的}\}$ との間には、互いに可換子環をとることにより 1-1 対応がつけられる。

以上により、 Λ/Γ が H-分離的、 ${}_\Gamma \Gamma_\Gamma \otimes_\Gamma \Lambda_\Gamma \otimes_\Lambda (\Lambda \otimes \cdots \otimes \Lambda)_\Lambda$ 、かつ Λ が Γ 上 f.g. projective である場合には、 $\Omega' = \text{End}({}_R \Lambda)$ の部分環の族 $\Omega'' = \{A' \mid {}_R A'_R \otimes_R \Omega'_R, A'/\Lambda: \text{分離的}\}$ 、

A の部分環の族 $\mathcal{A}' = \{B' \mid B'/A: \text{H-分離的}\}$, C' の部分環の族 $\mathcal{C}' = \{R \mid R/C: \text{分離的}\}$ の間に, 次のような 1-1 対応の存在が示される:

$$A' \cap C' = R, R \in \mathcal{A}' = A'; \quad \forall_{\lambda}(B') (= \forall_{\lambda}(B)) = R, \quad \forall_{\lambda}(R) = B'$$

On bilinear modules and Witt rings over a commutative ring

神崎 照夫 (大阪市大)

1. 以下, R は可換環とする. U は R -module, (M, B, U) は bilinear form $B: M \times M \rightarrow U$ をもつ bilinear R -module とする. M の non-singular element x と, $B(x, M) = R \cdot B(x, x)$ をみたす γ とで定義し, symmetric non-degenerated bilinear R -module (M, B, U) において, symmetry σ と M の non-singular element x に対して $\rho_x: M \rightarrow M; y \mapsto y - 2\gamma_y x$ 及び $\gamma_y \in R; B(x, y) = \gamma_y \cdot B(x, x)$ により定義する. そのとき, 標数が 2 でない体 K の直交群が symmetry で generate されるというよく知られた古典的な定理が可換正則環の上にもまで拡張される.

定理 (M, B, U) は symmetric non-degenerated quadratic R -module とし, 条件 " $\forall u \neq 0 \in U, \exists$ 中算元 $c \in R \mid R \cdot u = c \cdot U$ " をみたすとする. M が互いに直交する有限個の元で生成され, 2 が R の単元であれば, (M, B, U) の automorphism group (orthogonal group) は symmetry で生成される. とくに, R が正則環ならば, $U = R$ にとって, (M, B, R) についても同様に見える.

2. $\text{Pic}(R)$ は invertible R -modules のなす category とする. $\text{Pic}(R)$ の中の一つの U に対して, quadratic form $q: P \rightarrow U$ をもつ f.g. projective R -module $P = (P, q, U)$ について, U を固定して, 同型類の全体を考える. とくに $U = R$ のとき, Witt 環を構成するのと同様にして, U 上の Witt 加群 $W(U)$ が構成され, それは $W(R)$ -module となしている. $W(R)$ -module $W(U)$ の構造については, 次の場合だけが知られている: U が R 上の Picard 群の中で平方元ならば, 即ち, $\text{Pic}(R)$ の中に $V \otimes_R V \cong U$ をみたす V が存在するならば, $W(U)$ は階数 1 の $W(R)$ -free module である.

3. $W(R)$ の構造については, R が体の場合に限って, A. Pfister, W. Scharlar, F. Lamzy 等によって知られているが, R が環の場合にはまだ知られていない様である. R が complete Noetherian local ring で residue field が有限体である場合には, 次の様になる: 1) R の residue field で -1 が平方元ならば, $W(R)$ は 2 値の群の $\mathbb{Z}/(2)$ 上の group ring に同型で, 2) その他の場合には, $W(R) \cong \mathbb{Z}/(4)$, n は 4 の倍数, となる.

On Galois theory of pre-schemes

竹内 康 滋 (神戸大)

Grothendieck は S.G.A. 1961 において "revêtement principal" なる概念を導入した。アフィンの場合、これは C.H.R.-Galois 拡大を意味する。C.H.R.-Galois 理論を用いて、revêtement principal のガロア対応の理論を展開したが、Villamayor と Zelinsky が指摘したように、C.H.R.-ガロア理論は、ガロア群の部分群に対応する中間環を特徴づける研究であった。revêtement principal のガロア理論も、この C.H.R. 流のものである。従って、revêtement non ramifié の任意の中間 revêtement non ramifié に自己同型群の部分群を対応させるガロア理論を展開することに興味がある。これは、ある種の条件の下で可能である。それは、weakly Galois algebra と C.H.R.-Galois 拡大の構造と精密に調べることに、revêtement principal のガロア理論とによって得られる。また、quasi-Galois extension の概念も重要である。

R は可換環、 S は可換 R -多元環で R 上 integral とする。 S の R -自己同型の全体を G とする。このとき、 R の任意の素イデアル \mathfrak{p} に対して、

- 1) \mathfrak{p} が S 上の S の素イデアルなら、 S/\mathfrak{p} の商体は R/\mathfrak{p} の商体の正規拡大体である、
- 2) G は \mathfrak{p} 上の S の素イデアルの族に可移的に作用する、
- 3) S/\mathfrak{p} の R/\mathfrak{p} -自己同型は、すべて G の元によって惹き起される、

という3条件がみたされるとき、 S を quasi-Galois R -algebra という。この概念は自然に prescheme の場合に逆拡張出来て、quasi-Galois covering の概念を得る。quasi-Galois, étale covering (revêtement étale) を weakly Galois covering という。(アフィンの場合、これは Villamayor-Zelinsky の weakly Galois algebra の概念に一致する。) ここで、weakly Galois covering のガロア理論を与えることを目的とする。